

先生わかりません

矢田 凱夫

Yoshio Yata



文芸社

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

先生わかりません

矢田 凱夫

Yoshio Yata



はじめに 三十年前からの提言

在職三十八年を、小中学校の教師として過ごしてきた私の教員生活も、そろそろ終わりを迎えようとしている。いま、そんな私にとっていちばんの心残りは、なんといっても現在の学校教育の退廃ぶりである。

振り返ってみると、わが国ではいつも教育をめぐる論議がやかましかった。教育は常に国政の中心課題となってきた。ところが、あまたの教育論は百家争鳴に終わり、文部科学省はその責務から、一応の教育指針を示すが、いつも挫折に終わっている始末である。めざす教育の姿は、一向に見えてこない。

最近も、二〇〇二年度から小中学校を皮切りに、新しい学習指導要領『総合的学習の時間』が導入されたばかりだ。そういえば、教育基本法の見直しも話題を呼んでいる。「ゆとり」「特色ある教育」「生きる力」といった、一見すると魅力的な文言が踊る今回の新学習指導要領も、早晚挫折の憂き目にあうのは見えている。教育基本法をめぐる動きにいたっては、また国家に従順な兵士をつくるつもりなのかと、腹立たしいばかりである。

私には、多くの教育論議や新しい教育の試みがなされるたびに、実際の教育はだめになっていくように見える。官民を問わず、国全体がこれほど教育を憂えているというのに、いったいどうして学校教育はよくならないのか。その最大の原因は、現在の学校教育がかんじんの子どもたちを、視野にいれていないことにある。そう、私には思えるのだ。

めまぐるしく変わる学習指導要領も、君が代・国旗掲揚問題などどれひとつとっても、一人ひとりの子どもをどう育てていくのかという、教育の原点からは無縁のところだ。議論されるのが常だった。そうこうしているうちに、子どもたちは荒れ、空疎で建前ばかりの学校教育は、なす術を知らないといったありさまである。

かつて、学校の施設や設備は、いまにくらべるとずっと劣悪だった。ガリ版印刷の教材作成は、徹夜も稀ではなかった。それが、タイプライター、ワープロになって、いまやパソコンの時代である。百枚のプリント印刷もわずか一分。仕上りの美しさといったら夢のようだ。プールや体育館も時を追うごとに立派になった。

私たち教師は期待したものだ。これで、教育に余裕が生まれる。子どもたちと接する時間をもっと増える。当然、授業の質もよくなるはずだ。そうして、次代を担う優れた青年を育てていくのだ、と。

ところがどうだろう。いま、教育現場では多くの教師が疲れているように見える。雑用や規則にしばられて、思いどおりに授業に取り組むどころではない。子どもたちに振り回ける時間さえままならない。放課後の校庭や教室で、子どもと教師がともに戯れる。そうした、昔見なれた光景を目にしなくなってもう久しい。

学校教育の現場にあつてさえ、子どもたちはどこかに置き去りにされてきたのだ。教育の真ん中に子どもがいらないのだ。むしろ、学校も教師も、子どもたちの姿を見失っていると言つたほうがいいのかもされない。

このように、わが国の学校教育は、いつの頃からかあるべき「本当の教育」とは、まったく違う方向へと舵を切つてしまった。私にはそれが、日本の社会が豊かになり便利になるのと時をひとつにしているように思われる。

戦後しばらくして、機械・物質文明が広く深く行き渡つてくるのにしたがつて、効率性一辺倒の社会から人間性が希薄になった。そして社会の進歩に反比例するように、全国津々浦々から教師の悲痛な叫びが聞こえはじめてきたのだ。ある五十代の教師は新聞の投書で、職員室が静かになり教師同士の教育論議がなくなったと嘆いていた。

本書は、そうして失われてしまった「本当の教育」を回復するために、世に問うもので

ある。というのも、私には、これこそ「本当の教育」なのだ、自ら納得のできる教育実践がある。そして幸いなことに、私はその一部を教育日記として記録しておいたのである。当時の私は、教職についてちょうど十年目。和歌山県和歌山市立山東小学校^{さんとう}で、六年A組を担当していた。『先生わかりません』と題したこの教育日記は、一九七五年度の学年初め（四月）から終わり（三月）までの一年間、ほぼ毎日休むことなく書き綴ったものだ。もともと、研究授業用の資料として作成したために、ごく少数の教師仲間をのぞいて公にするつもりはなかった。

それからほぼ三十年。病氣療養中だった私は、なつかしさに誘われ、ふと教育日記を手にとってみた。それは、思いもかけない新鮮な驚きだった。そこには、私でさえもが忘れかけていた、理想的といっても過言ではない学校教育が、あまりにも自然に描かれていたのだ。教育に関する基本的な姿勢や考え方は、いまとまったく変わっていないかった。物質的には恵まれない不便な時代のことである。それなのに、どこかゆとりや豊かさを感じられる、子どもたちや保護者との交流、授業・学級運営の様子。いまよりずっと自由な職場の雰囲気。私はいまさらながら、自分がそうした教育を手がけてきたことを誇りに思った。

本書で私は、この教育日記を紹介し、当時の記憶を呼び戻しながら、私が三十年前の教

育実践を再現していきたい。そこに、教師はもちろん、保護者や教育行政の関係者にとつて、理想の教育に一步でも近づきつけになってほしいという願いがある。

とりわけ、これから学校教育を背負っていく若い教師に、本書を捧げたい。教育日記のなかの私は、生身の教師として、教育現場で生じるさまざまな出来事と必死になって格闘し、一喜一憂している。そうした具体的な実践の一つひとつが、まだ経験の浅い彼ら彼女らの行く手を照らす、貴重なアドバイスにもガイド役にもなるに違いない。

嬉しいことに、本書の執筆をきっかけに、教育日記の対象になった山東小学校六年A組の教え子四人と、保護者三人が久々に集まってくれた。皆さんには、三十年前を思い出してもらい、おおいに語っていただいた。それについては、本書の第二部と第三部にまとめがある。私の教育実践がどんなものだったか、貴重な証言となった。皆さんには、お礼を申し上げたい。

私は、ただ昔に帰ればいい、昔に帰れと言うつもりはない。けれども、どんなに時代が変わっても、「忘れてはいけないもの」「失ってはいけないもの」があるはずなのだ。私にとって、それは三十年前にたしかに実を結んだと思える私の教育実践であり、それを支えた私の教育理論なのだ。

たとえ、それが百家争鳴のひとつに過ぎないとしても、本書が空しい叫びに終わろうとも、それを世に訴えることは教育者としての、私の責務なのである。

そして遂に自衛隊の海外派遣が強行された。

「教え子を再び戦場に送らない」という、戦後の教師の誓いが、今、かき消されようとしている。

私は教育現場を離れても、子どもを守るためにやるべきことは尽きることはない。

もくじ

はじめに 三十年前からの提言—— 3

第一部 私の教育実践—— 13

第一章 すべては子どもを知ることから始まる

◆ やつと届いた心の訴え—— 15

◆ 意外な悩み—— 18

◆ 詩は密度の濃いメッセージ—— 21

◆ 対話の道具を持って—— 26

◆ 子どもに叱られよう—— 32

第二章 学級運営は生徒が主役

◆ ヘマを言える雰囲気をつくる—— 37

◆ 「禁止」より「回り道」—— 39

◆ 小さな冒険が投げかけた大切なこと—— 46

第三章
◆子どもたちは一生懸命が大好き——52
教えることは難しい

◆各駅停車の教育——56

◆競争心はヤル気のもと——62

◆この道より我を生かす道なし——70

◆感情的な説教は甲斐がない——79

第四章
教師と保護者は対等のパートナー

◆体罰問題は相互不信の表れ——82

◆ふだん着の授業参観は見果てぬ夢——89

◆所信表明で保護者の理解を得る——94

◆保護者の信頼が教師を生かす——98

◆「保護者の輪」づくりを手伝おう——100

第五章
自由でオープンな職場をつくる

◆だれだって万能ではない——104

◆縦型管理組織から自由な横型組織へ——111

◆なんでもありの「なんでもやる会」—— 117

◆時には子どもになってみる—— 121

◆教師だって学校は楽しい—— 125

第六章 教師という職業

◆「デモシカ先生」からのスタート—— 130

◆理想の教師像—— 137

◆教師の喜び—— 142

◆別れそして新たな出発—— 150

第二部 保護者が見た「矢田学級」—— 165

期待どおりのすばらしい二年間—— 167

優しくて筋の通った教育—— 170

個性を育て得意分野を伸ばす指導—— 173

第三部 六年A組ふたたび—— 教え子たちとの座談会——

終わりに—— 196

第一部

私の教育実践



山東小学校旧校舎（切絵 柳野浩康氏作・山東小学校校長室所蔵）

第一章 すべては子どもを知ることから始まる

◆ やっと届いた心の訴え

それは、三学期の始業式があった日のことだった。

「友だちをつくりたい！」

小さな紙切れに書かれた、たった一行の和弘のこの言葉に私は声を失った。

その日、私はクラスで新年の挨拶をすると、すぐに黒板に大きく「60」と書いた。私が担任する六年A組の子どもたちも、あと六十日で卒業式を迎える。私自身まだ無数にやり残したことがあるような気がして落ちつかなかった。

残された日々はわずか。私も、みんなが中学校に行っても困らないように一生懸命教え

る。だから、子どもたちも、精一杯がんばってほしい。そんな思いを「60」の数字に込めたのだ。

それから、毎年の恒例で、新年の抱負をみんなに書いてもらった。

「今年は小学校最後の年です。二度とない小学校時代を勉強にスポーツに遊びに、いっしょうけんめいがんばって一日を大切にすごしたいと思います。」

ちえ」

一枚一枚、子どもたちが書いた抱負に目を細めていた私は、友だちがほしいという、心の底から振り絞るような和弘の切ない願いを、卒業間近になって初めて知ったのだ。それは、思いも寄らないことだった。

日記●一九七六年一月八日 木曜日

「友だちがほしい」

多くの子どもたちは、間近に迫った中学校への抱負と、残されたわずかな小学校生
活をしっかりとがんばりたいと書いていた。

そんな中で「友だちをつくりたい」と、ただそれだけを書いていた和弘の一文に、ぼ
くは考え込んでしまった。

和弘は学校から帰ると家の中にこもりがちで、友だちの家に遊びに行くような性格
ではないと、彼を担任する時に聞かされていた。ぼくは機会を見て、学校から帰って
からも友だちと遊ぶように和弘に言ってきた。

しかし、他の子どもたちと一緒にいるのは、ぼくがそう言った時だけに終わってい
たようだ。だからぼくは、和弘は友だちと遊ぶのがきらいなんだと決めつけてしまっ
ていた。だが、よく考えてみると、友だちと遊ぶのがきらいな子がいるはずがないの
である。

私はあまりにうかつな自分を恥じた。和弘の本当の心を理解しなかった私の言葉は、彼
の孤独を癒す慰めにも、アドバイスにもならなかっただろう。和弘に対するそれまでの私
の行為は、教育と呼ぶに値するのだろうか。

子どもの心のうちを知らずには、どんな教育も始まらない。私は改めて、教育の原点に立ち返らざるを得なかった。

◆意外な悩み

子どもの心を知る。そうは言っても、実際にはどうしたらいいのか。なかなか難しい問題だ。

「生徒の絵を見ると、その子が何を考えているかわかる」

と、図工が専門だった同僚の教師は言った。

そのとおりだと思った。自分の得意なもの、好きなものを通して見ると、人の心は理解しやすくなるものである。私は、詩や小文を書くことが好きだ。だから、教職についての頃から自由ノートも含め、ことあるごとに子どもに作文を書かせ、生徒が何を考えているのかを知ろうと努めてきた。「てのひら作文の会」という集まりを教員有志でつくり、作文や詩を授業や学級運営に生かす方法を研究し合ったりもしていた。

と言っても、点数をつけるのが目的ではないのだから、きれいに書いたり、うまく書い

たりする必要はない。子どもたちが日々の生活で何をし、何を考えているのかを素直に書き表すのが大切なのだ。

「友だちがほしい」という、私が思ってもみななかった和弘の訴えも、そうして初めて知ることができたのである。

日記●一九七五年五月九日 金曜日

「相談します」

千恵の自由ノートに「相談します」と題して、次の一文が書かれていた。

「私の家の前をトラックやダンプなどが行き来します。ダンプが通るたびに、ブルン、ガタンという大きな音。それにほこりがたちます。ほこりがたつとせつかくあらった洗濯物がだいいしです。

そこでダンプの責任者に相談した結果、水をまくことになったそうです。でも、水をまくと道路がびちゃびちゃ。そこをダンプが通ると、どろがとんできて服やくつがよごれてしまいます。

そこでダンプが来ると道から三〜四メートルはなれます。するとあまりどろがとんできてもかかりません。でも、こんなことを続けていたらきりがありません。

どうしたらいいですか？

「ここへ先生のこうしたら？ という答えを書いてください。」

（

）

当時、山東小学校の学区内では、団地建設や宅地造成が進んでいた。六年A組にも、そうして団地に移り住み、山東小学校に転入してきた子どもたちが数多くいた。千恵自身もその一人だったのだ。

実際、校門前の道も、いくら整地を繰り返しても、ひっきりなしに行き来するダンプカーの重みで、でこぼこ道になってしまっただけだった。

日記はこう続いている。

ぼくは答の欄に何も書けなかった。この相談を、ぼくが解決できるわけではない。子どもたちにも聞いてみた。すると、「ダンプカーをつぶす以外にない」という答が多く

て、現実的な妙案が出てこない。結局、「遠まわりして、ダンプカーの通らない道を通つたらいい」という意見が、やむを得ぬ解決方法となった。

千恵のやや不満そうな様子が、いまでも私には忘れられない。なんの力にもなつてやれないのは辛かった。それにしても、子どもたちは社会を取り巻くさまざまな環境の変化を、自分たちの暮らしの身近な問題として考えていたのだ。それは、大人も子どもも同じなのだ。

千恵の意外な悩みを知ることができたのは、私には大きな収穫だった。国語の授業のための作文だったら、千恵はこんな悩みを書いたり、私に答を求めたりしただろうか。私は、子どもたちに自由に作文を書かせてきて、よかったと思った。

◆詩は密度の濃いメッセージ

生徒の心を知るために、子ども同士がお互いをよく理解できるように、作文だけでなく詩教育にも私は力を注いだ。作文にくらべ、詩は言葉を見つけ出したり、選択したりする

密度がずっと濃い。

詩を書くこうとすると、自分の生活を見つめる生徒の眼差は、ぐっと真剣味をおびる。詩でなければ伝えることのできない考えや思いがあるのだ。

でも、教科書に掲載されているような、きれいで静かな、模範的な作品を書いてほしいとは思わなかった。そういう詩は、子どもの心の感動を素通りしてしまうように思えるからだ。私は、子どもたちがふだんの生活のなかから得た感動や思いを、素直に表現してほしかった。

そんな詩を読むと、パッと花が咲くように子どもたちは反応して、活発な話し合いが教室中を巻き込むものなのだ。そして、詩は教師の私にとって、子どもたちの心の奥底をのぞかせてくれる貴重なメッセージとなるのだ。

ここでは、私の心を動かした二つの詩を紹介してみたい。ひとつは私の好きな詩、もうひとつは私がドキッとした詩である。

〔好きな詩〕

算数の時

小泉 卓哉

ぼくは、先生にあててもらいました。

ぼくは、うれしかった。

そして、こたえると

「よろしい」といってくれました。

そして今度は、むりにあててもらいました。

また、「よろしい」といってくれました。

あててもらってうれしかった。

〔ドキッとした詩〕

あてずっぽう

斉藤美喜男

国語のテストがあった。

いくら考えてもわからなかった。

ぼくは あてずっぽうで書いたら

三つのうち、二つがあたっていた。

これからわからなかったらあてずっぽうで書こう。

この二つの詩を、私はこんなふう to 受けとめた。

日記 ● 一九七五年七月十日 木曜日

「心を動かした詩」

卓哉は、算数は不得手である。挙手もあまりしないし、たまに挙手しても間違っているのも多かった。そんな卓哉をぼくは、「算数ができない。きらいなんだ」と決めつけていた。しかし、卓哉のこの詩を見せられて、卓哉がぼくに指名してもらった喜びを力いっぱい書いていたのに驚いた。そして、卓哉にも算数をやる気力がいっぱいあるじゃないか、と反省させられたのである。卓哉に、算数ぎらいと決めつけていたことをわびる気持ちでいっぱいになった。

美喜男の詩を読んで、ぼくはテストに対する子どもたちの警告だな、告発だなと思った。三つの答のうち二つが当たっていた美喜男の喜びがわかる。しかし、そのあとで、「わからなかったらあてずっぽうで書こう」とする考えは、美喜男のテストに対する抗議だとぼくは思った。

この詩を教室で読んだ時、子どもたちはどっと笑った。ぼくもおかしかったが、子どもと同じようには笑えなかった。こんな考えでテストを受けてもらっては困るからだ。

卓哉の詩は、卓哉を見る私の目を変えてくれた。それまで、難しい算数の問題で卓哉を指すのに少しためらわれる気持ちがあった。けれども、この詩を読んでからは、遠慮なく指名できるようになった。そうして、うれしそうに答える卓哉を見ていると、私もまた授業が楽しくなるのである。

一方、美喜男の詩は私の心にズシリと重いしこりを残した。テスト教育の弊害は指摘されるだけで、一向に改善される兆しはない。あてずっぽうは、テスト嫌いな美喜男の防衛策に違いなかった。テストはいやだとも、つらいとも、ひと言も書かれていない詩。そこからは、テストプリントに対する美喜男の鋭い抗議が伝わってきた。

◆対話の道具を持って

作文や詩を通して、私は子どもたちについて多くを知った。私は、子どもたちから一方的に話を聞くだけではなく、もっと活発に対話のできる環境を整えたいと思った。そうして頭に浮かんだのが、「詩の小箱」だった。

日記 ● 一九七五年六月二十一日 土曜日

「詩の小箱」

事務分掌で、ぼくは玄関の黒板掲示をやらせてもらっている。毎週、自作の詩でも書いてみようと思ったからである。他にそういう先生がいないところを見ると、ぼくは他の先生方にくらべて詩が好きなのかもしれない。

「詩のある学校」。この言葉に、何かあたたかいイメージを感じる。すてきたなと思う。ぼくの望むべき学校である。自作の詩を掲示するだけでなく、子どもの詩を掲示するのもいいと思うようになった。

巧拙はともかく、私は詩を書くのが苦にならなかった。むしろ、ペンを持って、文字を走らせていると気分が安らぐのである。私は大好きな詩を生徒と交換し合って、もつと対話の機会を増やそうと考えた。

そこで、子どもたちに詩を投稿してもらうために、校務員さんに頼んで郵便受けのような「詩の小箱」を玄関につくってもらった。子どもたちに詩ができれば投稿してもらおう

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

矢田 凱夫 (やた よしお)



1943年、和歌山県有田郡湯浅町生まれ。
1966年に和歌山大学を卒業後、和歌山市内の小・中学校に在職38年。趣味は海外旅行。
1969～74年 和歌山市立砂山小学校教諭
1974～77年 和歌山市立山東小学校教諭
1977～80年 和歌山市立東中学校教諭
1980～82年 和歌山市立高積中学校教諭
1982～85年 和歌山市立紀之川中学校教諭
1985～99年 和歌山市立日進中学校教諭
1999～2000年 和歌山市立日進中学校教頭
2000年～ 和歌山市立西和佐小学校教頭
現在、和歌山県在住。

E-mail:igoichi@athena.ocn.ne.jp

先生わかりません

2004年6月15日 電子出版発行

著者 矢田 凱夫
発行者 瓜谷 綱延
発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)
03-5369-2299 (営業)

<http://www.boon-gate.com>

© Yoshio Yata 2004 Corded in Japan

ISBN4-8355-7107-X C0095

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト <http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)

新 04.05.24 Y.H.